重度心身障害児への人間学的接近（第10報）

——人間としての生きざし——

村　上　英　治

はじめに

コロニー8年，この年もまた多くの体験記録が寄せられた。この実習に始めて，あるいはふたたび参加を試みた人びとの，そのフレッシュな眼でとらえた，障害児者の生きるなまのすがたが，またそれとの取り組みの悪戦苦斗が，そこにはあらわにえがかれる。もしここで，こうしてこの子たちと出会い，かかわることなかったならば，おそらく，その生涯をとおして会得することのできなかったであろうような，いうなれば，かけがえのない，貴重な体験で，それはあったといってもよい。

重度，重症，さらに重複の障害をになった子どもたち，中には20才すぎた人たちもいる。そうした一群の障害児者たちが，ひっそりと，このこばと学園五つの病棟の中で生きている。ただそれだけで，そのありようを垣間みただけで，幸い五体満足に生きることを許された私たちは，何か身内によぎる感動をよびさまさせられる。もちろんそれは，ありきたりの感傷だとか，同情だとかいったものではない。生きているということ，人間として生きているということ，自明のものとして，これまで，我と我が身にほとんど問いかけることもなかった，この人間存在におけるもっとも根源的な課題が，特別意識するわけでもないままに，きびしい自己課題として私たちの前に浮かびあがってきて，私たちはそれから目をそらすことができなくなる。彼らが生きている，それはとりもなおさず私たち自身が生きていることに連なる。すべての他者性はきりすてられて，まったく無媒介的に，私たちは，今こうして生きていることを実感し，その生きることの意味の重さに一瞬うちふるえるのである。

「その感動を，感動のレベルにとどめないで下さい。それを理性のレベルにまで高めること，これこそ現場の私たちが，みなさんに期待したいことのひとつです」この年実習に先立って，こばと学園，岡田喜篤園長から，実習生全員に語りかけられた言葉は，きびしくかつ重く，私たちの耳朶になお残り，胸の奥底深くを打つ。この年の体験記録が，それが強く意識化されると否とにかかわらず，それぞれ実習参加者全員，ひとりびとり，自分自身のこうして体得した感動の理性化をめざして試みられたもののように思われるのは，こうした背景に立つからにほかならない。

4泊5日，一応担当と定められた子どもとの取り組みの中で，あるいはみちあふれる充実感を，あるいは虚しいからまわりを，それこそ夜ごと夜ごと書きつゞった日録は，こうした実践をはじめて体験したものの，誰しもが出会うであろうところの，みずみずしい感動の露呈である。実習おえて1ヶ月，あるいは2ヶ月たち，ふたたびそのなまの記録をよみなおし，遠くコロニー，こばと学園に，またかかわりをもったそれぞれの子どもたちに思いを馳せるとき，その当時の恍惚とまではいかないまでも，かなり昂揚気分にあった情緒様態も少しは静まり，かなり冷静に，この実践体験を省りみる余裕が生まれてきて，その感動を理性のレベルにまで高める方向へとすすめることが可能になる。もちろん人によってその主題はさまざまであり，独自の体験から得られた，こうした体験の記録は，ほかならぬその人独自のものとして深い意味をもつ。ひとりの人が，ひとりの障害児と出会い，短い期間ながらとにかく真剣に取り組んできた，その人なりの視座に立つ，4泊5日のまとめは，こうして今，それぞれ独自の主題をひっさげて，私の前にまた提起されるのである。

「私にとってコロニー実習とは何であったのか」それぞれフレッシュな参加者につきつけられた，この種の課題に即しての，こうした体験記録は，また私自身に学ぶべき多くのものを与えてくれた。主題のちがい，視点の差違，取り組み，かかわりの深浅，さらにまた表現様式の個性差は当然ありながら、これらの実践記録をよみとおしていくとき，それら報告の底にひそむ，一貫するところの普遍性といってもよいものが，かなり共通していることにも，このときまた気付かされるのである。個をとおして普遍をどこまで抽象しうるものか，この課題は決して容易ではない。しかし脈々とその根底に流れる，この種の実践体験の中からにじみ出る，より根源的な主題を，本質直観的に把握することが，私にまた要請されているもののように思われる。実習に参加した学生諸君

とまったく同様に，共通の場で，共通の視座をとおして障害児者の生きるということの意味を，また彼らの発達の可能性を模索しつづけようとする私への，それは，現時点における自己課題にほかならない。

この要請に十二分に対処し，こたえうるかどうかの自信はまったくない。しかし，基本的にこれまで一連のこの種の研究報告の流れの中に位置づけられる主題が，障害児者たちが，たとえ，どれだけ重度，重症，さらに重複の障害をもとうとも，人間として生きるということにかわりはなく，その自己実現への責任性をはたしていくべき可能態としてのとらえを，展開していくことにあるとする限り，本報告もこれまで第9報までの実践をふまえた上で，今一度「人間としての生きざし」に焦点をあてて，私のもとに寄せられたすべての体験報告の底にひそむ，人間として生きる，障害児者のさまざまな生きかたの問題点やら本質やらを抽出する努力を試みることも意味あることと思うのである。別の云い方をすれば，それは，理性のレベルにまでひきあげられた感動の記録の再構成化であり，いうなれば，二重の，感動の理性化にほかならない。

ところで「生きざし」とここでいうのは，たしかに耳慣れない熟さない言葉に違いない。今までの私の用語からすれば，「生きざま」がそれにあたる。障害児者たちがせいいっぱい，自分の賦与された可能性を発揮すべく，それこそ歯をくいしばって必死にもがきながら，生きつづけていこうとする，一種の悲愴感すらただよう，人間の生きていくすがたを，ただありきたりに「生きかた」といってしまうのでは，じゅうぶんその意図が伝わらない気がしていて，かなり流行語的にも用いられているこの用語を，私は不用意にも用いすぎてきたきらいがある。しかしここ2，3度，中日新聞のコラム欄*にも寄せられた，寸言，評言は，私の胸に痛くささったのである。吉田知子も，安田武も，「死にざま」は昔からあって，腹かっさばき，はらわたつかみだして，天を呪い，人を怨んで死んでいくすがたは，たしかに「死にかた」ではなまぬるく，「死にざま」とよばれていいという。広辞苑によれば「――ざま」は，様子，ありさまというのを憎しげにいう語とある。多田道太郎も，「ざま」は悪態をつくことで，「生きざま」というと，「生きかた」そのものをあざける心持があることになると語っている。たしかに「ざまをみろ」とか「ざまはない」とか，それはまさしく悪態語であり，広辞苑にも「死にざま」は出ているが，「生きざま」はない。「生きざま」にかわって「生きざし」というべきだと主張するのは，安田武で，広辞苑にも「いきざし」はある。ただこれは「息差」であって，①生きづかい，呼吸，②けはい，様子，風采を意味するとある。しかし，「――ざし」は接尾語として，広辞苑にもふたたび見られ，ある語にそえてものの姿・状態をあらわす接尾語とされる。「まなざし」「おもざし」としてたしかに日本語でも慣用的である。人間が生きていくすがたの尊厳性を謳いあげ，たたえようとする視点に立っての人間学的接近を，私たちが志向しようとする限り，私はここでも深甚な反省にさらされる。不用意な不誠実ですらあった私自身の語法を，きびしく自己批判するとともに，今后私も，安田武にならって「生きざし」という言葉を用語としても普及させたいと思うのである。

「人間としての生きざし」障害児者たちが，その重い障害をになって生きぬいていくためにさまざまの壁にぶちあたる。人とのつながりにおいて，依存と自立の葛藤をどのようにきりぬけて，人間自立の道をたどろうとするのか。自分がまさしく他の何人でもない，自分自身として生きぬいていく道すじ，つながりを拒絶すること，そこにはじまる，いうなれば自己確立への過程はここから踏み出される。本報告第1の主題はここに求められる。

さて多くの人間がこのように人間としての歩みをふみ出していくとき，その最初に出あう significant person としての，母親とのかかわり，さらに母親をも含めての家族とのつながりが，いかばかり重要な意味をもつかについては，改めて問うまでもない。生まれてかなり早い時期から，隔離施設であるコロニー，こばと学園に収容されている障害児者たちが，時たまに訪れてはくる親たちとのつながりの中で，どのような思慕にひたされるのか，訪れの少ない障害児者たちが，またその痛みをどのように投げかけるのか，あるいはまた，それがたまさかの出会いであればあるだけに，その別離の悲しみが，いかに胸のうち深くしみわたるのか，家族――親なるもの――とのつながりが，かくして本報告では，第2の主題となる。

このようなつながりをとおして障害児者たちも，そのきびしい「人間としての生きざし」をあらわに示し出す。「生まれてきてすみません」「生まれてきてごめんなさい」，これまた，私たちのこの種の接近の端緒ともなる主題であった。しかしこの種の発想は，それこそ歯をくいしばり，魂の奥底でのもがきの中で必死に生きぬく障害児者たちの自己確立を，自己実現を援助していこうとする道すじの中では，どちらかといえば，慈善・れんびん的な，一時代前の福祉の姿勢につながるものとの誤解

＊吉田知子：変わっていく言葉たち　「私の文化程度」中日新聞（夕刊）　昭和52年11月14日

＊生きざまの語感「大波小波」　中日新聞（夕刊）　昭和53年5月10日

をさけがたい。より積極的に一個の人間として，私たち健常者とまったく平等の地平に立っての生きかたを，私たちが讃え，それこそ意味深く私たちとともに生きぬくことを期待するならば，「生まれてきたからがんばります」とまなじり決して，彼ら自身に力強く叫ばせねばならないのではないだろうか。そこにこそ生きていることの明証を，この私たちの住む世界に向って立証し，世界内存在としての，「人間としての生きざし」を，叙いあげていく第3の視座があるように思われる。

以下その線にそって，この年新しくあるいはふたたびこのコロニー実習に挑戦した実習者たちの，先にかかげた，感動の理性化をめざしての体験報告を，なまのままの形で提起することによって，ふたたび，みたび，深く障害児を学び，人間本来の生き方にめざめたいと願うのである。

Ⅰ　つながりの拒絶
―自己が自己であることの主張―

Ⅰ―1　甘えとしての拒否

はじめてのマコちゃんとの対面は，私にとって，多少とも，ひっかかりのある，というより，とっつきにくいという印象のもとになされた。私自身のながめ的姿勢のせいからか，マコちゃんが，初対面の私をどのようにとらえてくれたかが，気にかかった。

2日目。初日のためらいがまだ残っているためか，動きの少ないマコちゃんに飛び込む勇気が持てなかった。そのためにどうしても，自然に動きの多い，みずからかかわりを求めてくる子どもたちの方に近づいてしまった。私が彼らと話をし，いっしょに遊び合うことで得られる安堵感によって，マコちゃんになかなか飛び込んでいけない自分をいくらかなぐさめたつもりだったが，それは，結局のところ，マコちゃんとの関係を不安なものにしたにすぎなかったように思われる。

こういった私のかかわりの姿勢を，マコちゃん自身も認めたのであろうか。彼女なりの無言の抗議として，食事介助の拒否を示してきた。この時点で，拒否という形であれ，このことが，私に対してのはじめての彼女の意志表示，いや，私へのかかわりとして受けとめられるような私ではなかった。むしろ，敗北感すら胸に込み上げてきて，不安が消え去らない私自身のあり方に，人と接することのむずかしさを痛感した1日であった。

3日目にして，なお，マコちゃんに抵抗のある私。あいもかわらず受ける拒否。しかし，何かちがう。この拒否というものが，彼女の私への甘えではないかということであった。言語表現ができず，自らのはたらきかけの困難なマコちゃんができる，自己主張のあらわれと考えられはしないだろうか。

拒否というのが，かかわり手の私との間に一線を引くことではなく，相互にかかわり合うためのひとつのきっかけとなっているのだと気づいた時，私自身のこだわり，不安が，いつとはなく自然に取り除かれていったのである。　　（吉川由香里）

とっつきにくさからはじまって，マコちゃんのふところに，いや心の中に入りこめない吉川。不安定なままで，初日　2日とすぎす吉川に，マコちゃんは無言の抗議として食事介助の拒否を示す。拒否に出会ってとまどい，どちらかといえば，自分の方から拒否的になって，いよいよ構えてしまう吉川が，視点をかえて，彼女の拒否を甘えとしてとらえるようになってきたときに，ひとつの転機は訪れる。それ自体，ドラマチィックなものではないにしても，拒否をひとつの意志表示として，人間が人間であることの明証としての自己主張と考えることから，新しい展開が生まれてくるのを期待しうるようにも思えるのである。

Ⅰ―2　自分は赤ちゃんじゃない

「よろしくね」と言って，正江さんの手をポンポンと叩いた。表情はやや固いが，手や体に触れても嫌がらない。なんとか私のことを受け入れてくれそうである。正江さんに対してかわいそうだとか言った感情も，もちろん異様さといったものなど感じなかった。きわめて自然な出会いであった。友だちというよりお姉さんといった感じで接している私であった。「トランプ」と正江さんの顔の近くで言うと，ニコニコ笑い，「アーイ」と言って，私の後をついてゆっくりではあるが，軸まわり移動でついてくる。トランプにも参加できるし，私が働きかけたり話かけたりすると反応が返ってくる。とにかく最初に知り合いになる人に対しては，おしゃべりになる私であり，正江さんに対してもずいぶん話しかけたり，働きかけたりしてしまった。また正江さんがにこにこ笑って反応してくれるのをいいことに，図に乗って，過干渉気味なほど，働きかけてしまった。食事介助以外は，彼女は愛想よく私を，実に全面的に受け入れてくれていた。しかし食事介助には困ってしまった。私としては，スプーンに乗せるゴハンの量も，彼女が一番食べやすい量にと，そしてゴハンを食べたらおかずを，そのおかずも一種類のものを一度にたくさんというのではなく，少しずつ，彼女が

食べやすいように口に入れようとした，それに対し彼女は拒否，拒否であった。口をますます固く閉じていく。正江さんと私はもう会った瞬間から友だちになれたと思っていた，だから正江さんの食事介助拒否は私にとって信じられないことであった。

ままごと遊びを一緒にしている時の彼女は，楽しそうであり，私が「このカレーライスは少し辛いですね」というと，「お水をどうぞ」とコップをさし出してくれる。そんな彼女と食事の時の口を固く閉じている彼女は，私の目にはまったくアンビバレントな彼女としてうつり，とにかく理解できなかった。

2日目になり，昨日の食事介助拒否は，私の彼女に対するなれなれしさへの拒否であったのではないか，私のベタベタの介助を，「自分は赤ちゃんじゃない」と拒否したのではないだろうか，と反省した。今日は60分という，いつもの3倍も時間をかけた，ゆっくりの食事ではあったが，全部きれいに食べた。昼の食事も夜の食事も，ゆっくりではあるが，よく噛んで全部食べた。やはりベタベタの介助を彼女は拒否していたようである。

午前中，トイレコーナーで便秘で苦しんでいる正江さんに対し，その苦しみを半分背負って彼女を少しでも楽にしてあげたかった，そんな気持ちでいっぱいで私は彼女のお腹をさすっていた。しかしなかなか彼女は楽にならない。看護婦さんに「正江さんは，いろいろなことを自分ですることができるし，かなりプライドを持っているから，緊張しているんでしょうね」と言われ，たしかに誰でもあまり知らない人にトイレの世話をしてほしくない，私が側にいて，彼女を苦しめてはいけないと，彼女の側を離れることにしたものの，他の子供と遊んでいても彼女のことが気になってしかたがなかった。食事介助にしても，トイレ介助にしても，どうも余裕を持って彼女に接することができない自分である。彼女がかわいい，彼女のために何かしたいという気持ちがいっぱいで，どうも私は，彼女の心の中に土足で入り込もうとしていたようだ。

（鵜野裕美子）

吉川同様食事介助の拒否に会い，それ以外の場面での正江の動きとのズレに戸惑う鵜野がいる。自分の入りこみ方のなれなれしさに対する拒否ではないかと気付きながらも，コロニーに入っての自分に課せられた役割が少しも展開していかないことに焦りを感じつつ，ともすれば何とかして手を貸してしまおうとする鵜野はまた，別の事態で，きびしいショックを体験する。

私のひとりかってな，彼女の気持ちを無視した，かかわり方，甘やかしはやめなければならない，と反省して3日目が始まった。私にとって非常にショックなでき事がおこった。私は車椅子で外に出ること，散歩することを思いついた。正江さんもにっこり笑って喜んでくれた。あんなに喜んでくれるなんて，きっと彼女は車椅子に乗ることが好きなんだ，と思った。しかし実際は，首がしっかりと立たない彼女にとって車椅子に乗ることは苦しいことであった。車椅子に乗せてしまったことを悔やんだが，もう乗ってしまったのだからしかたがない。私が押して，動かそうとすると，彼女は手を振り，「ちがう，ちがう」のサイン。私が車椅子から離れると，彼女は自分で，自分の不自由な腕全体を使って動かそうとする。なかなか前進できない。とっても苦しそうな表情。少しずつ前進する。その必死な様子には気魄が満ち満ちていて，甘い気持から補助の手を出すことなどできない。「がんばれ，がんばれ」と一生懸命声援した。この車椅子の事は私にとって非常なショックであった。「自分でやりなさい」などと命令はしなかった。私は私が動かしてあげようと思っていた。なのに何故彼女は，私の援助を拒否し，彼女にとっては苦しいことであるのに，自分で運転するのだろうか。誰かから義務づけられていることとか，楽しいことしかやる気にならない私には理解できなかった。しかしそんな彼女の姿に感動し，何か神聖なものすら感じていた。そして今まで正江さんに対し　何かを代わりにしてあげたい，少しでも彼女が苦しみから逃れることができ，楽になるためになら，どんなことでも代わりにしてあげたいといった気持ちでいっぱいな私であったことを知らされるのであった。でも彼女の車椅子に対する姿は、私に私の甘さを気付かせてくれた。彼女は私に代わりに何かをしてほしいなどということを期待してなんかいない。彼女は自分の人生に甘えなど許そうとしていないのだ。そんな彼女を今まで，真の意味で受けとめることのできなかった私であったことがはっきりした。これはまさしく私にとってひとつの転機を与えてくれたものといってよい。

（鵜野裕美子）

これはまさしくBoss流にいうなれば，〝配慮を要すべきことを他人にかわってひきうける〟仕方としての尽力的顧慮（einspringende Fursorge）の拒否にほかならない。焦れば焦るほど，鵜野は、正江に対し，一方的にのめりこまんばかりに，自らの救いの手をさしのべようとする。頑として拒否しつづけて自分の力で車椅子を動かす，その気魄に満ちた必死の「生きざし」にただ感動し

て立ちすくむ鵜野。〃悩みを悩みとして本来的に相手に返し与える〃仕方を志向しての垂範的顧慮（ voraus-springende Fursorge ）のきびしさをこのとき実感して，鵜野はまた今はじめてかのように，障害児とかかわって，共に生きていくことのむつかしさ，そしてまたその重味を実感するのである。

Ⅰ―3　私の心にふみこむな

コロニー実習にこの年，ふたたび挑戦しての溝口は，その前年，北棟で取り組んだトミちゃんとのつながりに深い愛着をもちつつも，今度は，病棟もかわり，担当児もかわっただけに，遠く垣間みることをとおしてでも，そのかかわりを深めようとしていたのに，思いもかけぬきびしい彼女からの拒否に出あって，まったくの衝撃の中にただ立ちすくむ。何故だろう。何故こんなに手きびしい拒否をうけざるを得ないのだろうか。模索しつづけて，溝口はやはり，そのトミちゃんをめぐる人とのつながりに，思いを馳せながら，誰しも同じではあろう，その家族とのつながりの深さに改めてかのように気付かされるのである。

私は去年のコロニー実習で，北棟のトミちゃんと5日間を共にした。そこで私は，青年期を迎えたトミちゃんの自己像にまつわる強い不安に直面することになった。

はじめの頃，トミちゃんは私に対し，一定の構えを決して崩そうとはしなかった。「自分は障害者だから，どんなに努力しても結局は，他人の介助なしでは生きられない。だから介助してくれる人には常に礼をつくさなければならない」 彼女はあくまでも身体障害者としての分をわきまえ，自分の〃甘え〃を許すことはなかった。そうしたトミちゃんの行動は，未熟な私にとっては，立派すぎる程立派であった。

そんな彼女が，ある時ふと，「昔は体がまっすぐだった。だけどこのごろだんだん曲ってきてしまった」と私にもらしたのである。それを機に，いちぶのスキもないかに見えた彼女の構えの一隅から，その構えの奥に潜む，あせり，不安が次から次へと吐露されたのであった。彼女は12才頃までは歩行器を使えば歩けたし，食事もひとりでできたという。しかし，12才頃から，体が大きくなるにつれ，段々自由がきかなくなり，16才の時の骨折を機に体が湾曲し始め，座ることはおろか，移動もままならなくなったのである。ちょうど青年期を迎えていた彼女にとって，実際，それは，耐え難いことに違いなかったのであろう，その極度の精神的混乱のどん底を少しづつ必死の思いではい上がり，20才を過ぎたトミちゃんは，重度の心身障害者としての自己を受容しようと努め，たとえ遅々たる歩みであろうとも自己の発達を信じ，とにかく懸命に生きていこうとしていたのであった。

トミちゃんはまた，家族との再会を熱望していた。彼女は私に，春休みに家へ帰った時の思い出を目を輝かせて話してくれた。「これ以上大きくなるとお父さんが困るから…」とさかんに体重を気にしていたトミちゃん。トミちゃんはいつかもう少し動けるようになって，お父さんたちと一緒に暮せる日が来ることを秘かに夢見ていたのかもしれない。

今年，実習の合い間に，私は北棟を訪れ，1年ぶりでトミちゃんと再会した。いや〃再会した〃というのは間違いかもしれない。何故ならトミちゃんは，私の視線をことさら避け，固い声で「全然覚えていません！」と私のそれ以上の関与を拒むようにきっぱりと言い放ったのだから……

私は本当にショックだった。「昨年中はいろいろお世話になりました…」というタイプで打った年賀状まで私あてに出してくれたトミちゃんとの〃再会〃がまさかこのようなことになろうとは，予想だにしていなかったから…… だが，こばと教室の壁に掲示してあったトミちゃんの作文や，北棟で実習をしていた仲間からの情報で，私はトミちゃんが夏期帰省中に，まさに母親代わりとなって彼女を育ててくれた〃おばあちゃんの失明〃という事態に直面し，かなりの動揺をきたしていることを知って，あれ程かたくなに私を拒んだ彼女の気持ちが，少しだけだが理解できたような気がした。そして，トミちゃんのカルテに「（おじいちゃん，おばあちゃんには）長生きしてほしい。ふたりが死んでしまったら，私の葬式はどうなるの」というトミちゃんの言葉を見いだした時，私は，彼女の中に渦巻く不安とあせりを，彼女が処理しきれぬまま内にため込み，必死でそれを押さえている姿を想像せずにはいられなかった。あの，私の顔を見ることさえ拒否したトミちゃんの姿は，「私の心の内には1歩も踏み込んでくれるな！」という彼女のせいいっぱいの叫びだったのではないだろうか……

そして，今年の実習で私はトミちゃんとよく似た障害の状態の中で，青年期を迎えた，担当児であるタカちゃんをはじめとして，セイちゃん，タカシ君たちと出会った。彼らは決して多くを語らなかったけれど，私は，彼らの言葉の端やちょっとした表情の中に時折彼らの，自分の障害に対してのどうしようもないやりきれなさとか，あせりのような感情に触れることがあった。そんな時，私は言葉を失い，ただ彼らを見つめ

耳を傾けるだけであった。今の私が何を言ったところで，彼らの気安めにもならないような気がしたからである。

彼らのような重度の肢体不自由者が，青年期を迎えしかもその精神の健康さ故に，自己自身を見つめざるを得なくなった時，その重い障害を一生背負っていかねばならない〝自己〟を，あるがままに受けいれることができるようになるまでの過程で，どれ程重苦しく深い混乱と戦わねばならないかということは　五体満足を当然のこととして日々暮らしている我々にとってはまさに想像を絶することであろう。我々は彼らの手足の代わりになることはできても，その障害の重みを彼らに代わって受けることはできない。ただ我々にできることは，（決して、彼らの内にズカズカと土足で足を踏み入れるという意味ではなく）彼らの苦悩に目を向け，耳を傾け　少しでもそれをわかろうと努力すること，そして我々自身も日々懸命に必死に生きていくことだけではないだろうか。その「生きざし」が彼らに伝わっていった時，単なる表面的な「つながり」にとどまらず，初めて障害を越えて，生きている人間と人間との真のふれ合いが生ずるのではなかろうか……　その「つながり」は，おそらく障害を持つ彼らの「希望」となり「力」となると同時にまた，我々自身の「希望」となり「力」になるであろう。それが彼らとともに生きるということではないだろうか……

（溝口明子）

ふたたび，溝口も，鵜野と同じく尽力的配慮の虚しさを実感しながらも，かなりの知性を秘めているトミちゃんの胸の底なる心の渇きに思いをよせるのである。この渇きをみたしてやることのできるのは　それとつながりをもつ誰であってよいというものではないようである。たしかにかけがえのないひとりの人としての significant person が持つ意味は重い。母親なきトミちゃんにあっては，おバアちゃんが，そしておとうちゃんが，どのような重いカゲを彼女の胸の中に投げかけていることであろうか。*

青年期を迎え，新たに自己との対決を余儀なくさせられるとき，このように障害をになったまま，生活年令の上では，20才を越えていく彼ら障害児者たちが，こうした施設の中にあって，自分であることを確立していくためにはいったいどのような生きかたが，要請されるのであろうか。行く道程はきわめてきびしいものがある。おそらく生涯にわたって家族の介助にたよりきることができない状況の中で，トミちゃんたちが，広い意味での人間とのつながりをもつため，そのにない手となるべき施設職員のはたす役割はきわめて大きなものとならざるを得ない。ただどのようにその深まりが期待されようとも，所詮家族そのものにかわりうるものではなさそうである。家族――特に親なるものとのつながりの重い意味については節を改めて次に考察することにしたい。

Ⅱ　親なるものへの思慕
―心の底なる渇き―

Ⅱ―1　家族の胸の内なる思い

私たちの研究実習の時期は，このところ毎年ほとんど，8月終りから9月始めにと定着してきた。帰るに身寄りもない子たちは別として，お盆をはさんで，かなりの期間，家庭に帰り，親きょうだいとの団らんを終えて，ふたたび学園に戻ってきたばかりの時期ではあるけれど，ひきつづき週1回，きまっての面会をつづける親も決して少なくない。この実習期間中，これまた恒例の花火大会が行なわれる折には，またそれをたのしみに，多くの親が訪れる。親と子どもとの，やはり家族でなければみられない，暖かい交流に接する機会を，私たちがこの実習期間中，かなり持てるのもこの故にである。

ことばのない子たちも多い。私たち自身，4泊5日という限られた期間ではあっても，こうしたことばのない子たちとのかかわりをどれだけ深めうるものか，それなりにせい一ぱい努力してきたつもりであっても，虚しい思いにひたされることいくたびかである。ところが，親との関係ではやはり違う。第8報にミカちゃんとの挑戦を試みた譲の体験は、母親であること，ただそれだけで決定的な意味をもつかかわりの展開を鮮かに示したものといってよい。* それほどドラマチィックの状況ではないにしても，こうした交流に心うたれる思いは，私たちにとって，きわめて身近な，ありふれた体験なのである。

夕食後，面会にみえていたユウちゃんという子のおかあさんと話をする。ユウちゃんは，8歳で南2では一番年下であるが，身体はすごく大きい。ほとんど寝たきりで，経管栄養である。まったく反応のないよう

---

*村上英治：重度心身障害児への人間的接近（第6報）――ことばある子と――　1976 名古屋大学教育学部紀要――教育心理学科　P22　参照

譲西賢：重度心身障害児への人間学的接近（第8報）――かかわりの視座をみつめて――　1977 名古屋大学教育学部紀要――教育心理学科　24 p. 154 参照

なその子を一生懸命に抱いたり，いろいろと働きかけたりしてみえるおかあさんの姿には，やはり心をうたれる思いだった。そして，小さくてかわいらしいススム君やハルちゃんを見て，「こういう子はみんなにかわいがられてほんとに得ねえ」と，しみじみ言っておられた。このことばにはドキッとさせられた。家族の胸の内なる思いは，私たちなどにはとうていおしはかることはできないものがあるのだろう。

（梅田和子）

張合いのある子と，張合いのない子と。反応のある子とあまり反応しない子と。これらとの実践的なかかわりの中で，私たち自身の側に，それに対応するありかたの違いがかなりあることを，たしかに認めざるを得ないだけに，そしてそのことが，すべての障害児者たちの可能性を引き出していくための援助のありかたという点で問題があることを自戒することまた多いだけに，ユウちゃんの母親のさりげない一言に，胸ふさがれる梅田がいる。まことに家族の胸の内なる思いは，重くまた深い。私たち自身どのように　彼ら自身の「人間としての生きざし」を求めて，その内にわけいることができるものであろうか。

Ⅱ－2　言葉にこもる無量の意味

家族の胸の内なる思いを私たち自身到底おしはかること出来ないのみではない。私たちは，また私たちと取り組む，この子たちの胸の内なる思いに，どれだけ同じく分けいることができるものであろうか。

限られた言葉でしか，コミュニケートできない修ちゃんに，それとのかかわり求めて高橋は，彼なりに必死にその言葉の意味を探り，その底にこもる修ちゃん自身の内的世界を知りたいと願う。言葉の表面的な意味内容だけでは，この子どもたちと分りあうことは所詮出来ない。その声の奥にひそむ無量の意味に，心傾けてききとろうとするとき，その内包する真の意味に気づかされて，新しく眼みはる高橋なのである。

修ちゃんと積極的にかかわろうと思い，話しかけていったが返ってくる言葉は，「ブーブー自動車」「とうさん」「先生，ガッコ」ぐらいで，その他は意味のわからないものであった。「耳」「目」「鼻」「口」が言えるのを思い出して，「頭」を教えようと思ったが失敗してしまい，むずかしいものだなと思った。こうなると彼の数少ない言葉は貴重であり，「ブーブー自動車」に答えてミニカーを出してやったが，すぐ後ろへ放ってしまって興味が無いらしい。やはり言葉と事物が結びついていないのであろうか。彼の今の目標は両者の関係を結びつける事だという話であるが，それがうまくいけば彼とのコミュニケーションも一層うまくゆくようになるだろう。彼が今ある言葉を獲得するのに何年かかったか，生まれた時からなのか，よく知らないが，これからも可能性の見出せる「修ちゃん」ではないかと思わせる。ドアの外に出て，道を通る車を見ようとした時に，ふたりで通りを見ながら「自動車来ないね」と言うと，「ハイ」と答える。しかし「自動車来た？」と言ってもやっぱり「ハイ」と返って来るので，失望感を味わわざるを得なかったものの次の状況では彼の心の一片を見たような思いがした。それは婦長さんが通りかかった時のことだった。「今日は車来ないね。車に乗っておとうさんが来るのにね」ということを婦長さんが言われると，私はその時　彼の言葉に「ブーブー自動車」と「とうさん」が一番多かったことに気がついた。結局，彼の「ブーブー自動車」はミニカーではなくておとうさんの乗った車だったのではないだろうか。言葉にはそれにこもる無量の意味がある。それがすべてではないだろうし，推測の域を出ないにしても，「ブーブー自動車」と言いながら道路の方を見つめている彼がかわいそうな気がして，一台ぐらい車が通らないかと思ったがダメだった。

（高橋昇）

Ⅱ－3　親との別離　―その悲しみ―

出会いは別れの始まりという。その出会いの体験が，ひとしおすぐれて鮮烈であり，重い刻印をきざむものであればあるほど，別離に際して，そのつながりを物理的にも心理的にも割くことになる，その痛み，その苦しみは，胸のうちいっぱいにしみわたり，他の何ものによってでも，到底いやすことできない深い思いとしてしこることになるであろう。

松尾に映じたアット君のその両親との面会のよろこびと，そしてそのあと尾をひく別離の悲しみは，情緒の両極をあまりにも大きく揺れ動かさせるものとして，コロニーにその後つづけている間，彼とのかかわりの中で，さらにはまた去らねばならない5日目の日を前にして，一刻たりとも脳裡から去り得ず，松尾のこころにしみとおるのである。少しく引用は長きにわたるけれど，別離に際しての悲しみにひそむアットの心の底なる渇きを，親なるものへの思慕のひとつの様相として，さらにまた，人間が人間として生きていく根底的体験につながるものとしてここに示しておきたいと考える。

3日目の朝，申し送りの場で今日の花火大会におとう

さんが来られることを聞き，朝さっそくアットくんに伝える。彼の喜びようはいつもより激しい。いままでは「ア〜イ」という言葉だけしか聞いたことなかったのに，おとうさんのことを伝えたとたん，「ブーブー，ブーブー」と言って，その喜びを表現するアットくん。しかし，今思えば，私は，アットくんのその喜びをほんとにわかってはあげていなかったようである。3日目は一日中，おとうさんが来ることで興奮気味の彼であった。食事中はなんとなくいそいそとして，一度口に，入れたものをボロボロとこぼしたり，またこのところみられなかったおもらしを2度もやった。保育の時間には〃ダルマさんダルマさんにらめっこしましょう〃をやったのだが，その時のアットくんの興奮はすごいものだった。保母さんや仲間が〃アップップ〃なんて向きあって顔をふくらませているのをみようものなら足をバタバタ上下に動かし，背中をつけたりあげたり，身体中でその喜びを表現する。その笑いも昨日までのものとは違って，〃キャッハッハッハッ〃というふうな，きわめて高らかに響くものである。アットくんは，そんなにまで興奮するぐらいおとうさんが来られるのがうれしかったのだった。それなのに，それをわかってあげられない私であった。ただ，おとうさんが来られるので興奮気味なんだろうというくらいの認知で　そこまで興奮してしまうアットくんの心の底の渇きをわかってあげられない私であった。私はそんな彼を見て昨日よりはるかに生きてる，じゅうぶんに生きてる彼を見て，もう私はかかわる必要がないとまで考えてしまったのだった。

そのため，この3日目は，他の子たちと積極的にかかわっていった私であった。夜の花火大会の時には，おとうさんだけじゃなく，おかあさんも見えられていた。生活の重みも感じさせないような，近代的な、理知的な，そして彼への暖かな愛をはぐくんでいるような，そんな素敵な夫婦であった。彼はおとうさんに，またおかあさんに抱かれ，花火に興じていた。なんだかそんな彼を見て，〃生まれてきてよかったな，アットくん〃という気持が心にわいて出た。アットくんの心の底も知らないで私は，アットくんてなんて幸せなんだろうと思ってしまったのだった。このこばとでは保母さんにもかわいがられ，そしてしばしば面会してくれるやさしい父母のもとに，彼はじゅうぶんに生きて，機能して，ほんとにしあわせな子なんだなと思ってしまったのである。

4日目の朝，保母さん，看護婦さんとの申し送り会でアットくんについて，次のような情報を得た。昨日の花火大会の時，両親が来られたが，それが終って両親と別れる時，アットくん泣いてしまったとのこと。私はビックリしてしまった。いつも暖かで，ニコヤカなアットくんのあの顔と，涙にまみれたアットくんの顔がどうしても重なり合わない。アットくんだって泣いたり笑ったりする人間なのに，私にとってはそれは信じられないことだった。ましてやその涙は　傷の痛みなんかで吹きだしたものでなく，両親と別れるのが悲しくて流された涙だったのだ。ほんとうに　信じられないことだった。施設の中で看護婦さんや保母さんに、ぞんぶんにかわいがられ，じゅうぶんに満たされていたはずのアットくん。いつも幸せそうで，ニコヤカなアットくんが，両親と別れるのがつらくて泣いてしまうなんて。私は，彼への認識が揺らぎはじめたのを感じながら，アットくんのいる所へ向かった。彼はいつものようにゴロンとじゅうたんの上にねころんでいた。彼の顔を心配げにのぞきこむ。しかし，アットくんは，いつものアットくんだった。やっぱり時々，歯をみせてニコォ〜と笑う。暖かな幸せそうなアットくんだった。私は，なあんだやっぱりいつもの満たされてるアットくんか，やっぱり心配する必要なんかなかったな，両親との別れもたいして，彼にとって重大なことでもないな，なんて思ってしまい，昨日のおもわく通り，他の子供たちと朝の時間を過ごしていた。もうこれ以上アットくんと接してみても，何にもならないような気がしたからであった。

しかし，アットくんは，やっぱり違っていた。昨日までのあのすばらしいアットくんとは違っていた。それは昼食の介助の時であった。いつもの彼は小さい身体に似合わないような食事をペロリとたいらげる。そんな彼を前に，こんな小さな身体のどこにこれだけのものが入っていくのかと心配していた程だったのに。今日の彼は，ふた口かみ口食べると，もう口をつぐんで，そのすわらない首を台の上にゴトンと力なく落としてしまう。私が支えてその首を上げてやっても，口を開こうとしない。それでもどうにか説得して，どうにか口を動かしても，また首をゴトンと落としてしまう。看護婦さんが寄って来て，注意されても変わりない。もう断固として食べようともしない。これは，夕食の時もおやつの時も同じだった。ほとんど何にも食べられないアットくんであった。昼食の時には，あまり気にしていなかった私も，夕食やおやつも食べれないので，だんだん心配になりはじめていた。しかし，やはりそれがアットくんの悲しみのゆえとは信じられず，単に身体の調子が悪いくらいのものだろうと片づけていた私だった。夕食の時に，あんまり様子がおかしいので，頭に手をあてるとチョット熱っぽいような

気がする。それで看護婦さんに体温をはかってもらったけれど，36.6度と平温であった。私の中でふたたび動揺がはじまる。アットくん，あなたは，ほんとうにそこまで悲しいの？　両親との別れをそこまで深く感じていたの？　アットくんにはそこまでの感受性があったの？　しかしながら、やはりその私の気持は、まだ疑問文のままだった。その後の散歩の終わる前までは。彼は，食事の時以外はたいして普通と変わりなかったからである。やっぱり暖かで幸せそうなアットくんだったからである。それでも朝の時間，他の子と接していた私も，なんだか心配で，午後はほとんどアットくんといることが多かった。

明日はもうこの子とお別れか，そんなことを思いつつ。なんだかアットくんと離れがたい思いがするのを感じつつ。何故だろう？　4日間顔をつきあわせ，彼の世話をしていたせいかな？　ほんとになんだか離れがたいアットくん。そんなジーンとした思いの中で，ついつい「アットくん，もう明日でお別れね」という言葉が口をついて出た。そしたらアットくん。それまで眉ひとつ，口ひとつ動かさず，無表情でいたアットくんが，椅子の上から，そのすわらない首で頭を持ち上げて，後ろにいる私の顔を見上げた。その顔はゆがめられ，口はすぼめられ，「ブーブー，ブーブー」という声を発して，ああアットくん，私は何ともいえなかった。その「ブーブー，ブーブー」という声は何ともいえない響きをかもしだす。一昨日，おとうさんが来られるのを知った時のうれしさを感じさせる，「ブーブー，ブーブー」とは違っていた。とても悲しそうだった。そしてようやく今，私はアットくんを知った。私が思ってたよりもっともっと深いアットくんを知った。たった4日間のつきあいだった私にさえも，その別れにあんなに悲しんでくれたアットくん。ましてもアットくんのかけがえのない両親との別れは，なんともいえないくらいの悲しみであったのだろう。そして，アットくんは決して，満たされた幸せなアットくんだけではなかったのだった。施設の中で，看護婦さんや保母さんにじゅうぶんかわいがられ，満足そうなアットくんだったのに，やはりそれだけではなかったのだ。私は何にもわかってあげられなかった。アットくんの心の底にある渇きを。アットくんのずっとずっと深い感受性を。アットくんも私と同じ人間であるはずなのに，どうしてあんなにまで簡単に，彼を，ただ幸せそうな，満たされた，かわいい子というくらいのものとして片づけてしまっていたのだろうか。私はじゅうぶんに生きてる彼に何ができるかということだけを思い彼をわかってあげようとはしていなかった。ほんとに鈍感な私であった。明日は別れという4日目の終りに，私はようやくアットくんの「ア」ぐらいを知ったにすぎないのかも知れない。　（松尾真由美）

ここには親なるものとの出会いの原体験がある。たしかに親でなくしては知り得ないであろう，アットの胸の内なる思いである。そしてまたおそらくアットでなくしては知り得ないであろう，アットの親たちの胸の内なる思いである。松尾にとって，いかにのめりこもうとも，アットへの思いははるかに遠いし，アットからの松尾への思いも同じく遠い。それはただ親なるものへの思慕によってのみ支えられる，人間として生きていくその「生きざし」のなまの姿の露呈でもある。この心の底なる渇きをみたしてくれるもの，親以外に誰しもないとするならばふたたびみたび，施設に収容され，親からの隔離を余儀なくされる，こうした療育のありかたが，はたして十全なのか，本報告における主題からはいささかそれるし，ここで改めて取上げることは控えるにしても，「人間としての生きざし」を追求していく上で，改めて省察すべき課題であることにはかわりはない。

Ⅲ　生きていることの明証（あかし）
―がんばります、生まれてきたからには―

Ⅲ―1　ふたつの情景　―孤独と連帯―

人間の生活なんて，そんなに劇的なものばかりではない。コロニーこばと学園それぞれの病棟で，日ごとくりひろげられていくルティーンの日課的スケジュールに沿って，多くの障害児者たちは，その日その日をただひっそりと生きていく。きびしくはげしい，つながりの拒絶にそういつもいつもぶつかるわけでもないし，親なるものへの思慕も四六時中顕現化されたままということもなく，心の底なる渇きとして胸深く秘められてしまう。そこにはただ，ごくあたり前の平凡な生活の場がくり返されていくだけである。馴れきってしまい，マンネリ化した眼には，とりたてていうほどのことは何もうつらなくなってしまう。

しかしほんとうに，人間の生活はこうして来る日も来る日も単調なくり返しで，展開をみせないものであろうか。事象をあるがままに，新鮮な眼でとらえていこうとする視点には，その何気なく見すごされてしまうような情景のひとつひとつが，新たな感動を伴ってよびさまされてくるのである。

4日目。今日は，高義くんをお風呂に入れた。私は看護婦さんのてきぱきした仕事ぶりにおされてしまっ

た。そこで考えたことは，彼らは生きてゆくことを他人の手にゆだねなければならないのと同時に，そういった人間ひとりの生命の重さをせおい，生きる人が，必要なのだということだった。専門の技術をもった人を彼らは必要としているのだと強く思われた。私は，高義くんの好きな歌をたくさん歌ってあげた。それに感応してかどうか，それは知らない。高義くんは涙ぐんでいた。それがゴミのためであったにしろ，アクビのためであったにしろ，ともかく涙が目じりから，ひとしずくたれていたのである。もしこれが涙であったのなら，こんなふうに声もたてずにひとり泣く子どもを私は見たことがない。それだけに高義くんの悲しみは深いと私は思うのである。　（小林京子）

5日間，たった5日間と，たかが5日間と言ってすませられないほど重みのある5日間。今なお思い出すたびに胸に熱いものを感じさせるいくつかのシーン。自分ひとりの胸の中にだけしまってはおけない程。夜，フトンの中で我知らず涙が出て困る程，私の中に衝撃的なものを与えた，あの光景を私は恐らく忘れられないと思う。

あの日，リエちゃんとただし君はふたりともソファーに座っていた。ふたりとも目は見えない。そしてふたりの間に会話はかわされていない。しかしソファーの傍に座っていた私は，ふたりの手がつながれているのを見たのだ。そのつながれ方の何とやさしいこと。ただし君の手が，軽くリエちゃんの手をつつみ，そのちょっぴり太い彼の指の先が，ほんとうにかすかに彼女の手の甲をさまよっている。触れる。そんな言葉がぴったりする，かすかな接触。ただし君は下を向いたまま，リエちゃんは天井を仰ぐようにして上を向いたまま。ただ，ただし君の指先だけがかすかに動いている。そんな静の世界。ただし君がその指先に彼の全霊をこめて何かを伝えようとし，リエちゃんは手の甲からそのすべてを受け取ろうと，少しももらすまいとしているような，そんな風景。時々リエちゃんの笑い。思わず彼らの手の上にそっと重ねてしまった私の手。「だ・れ・だ？」リエちゃんが大きな声で笑う。ただ手と手を重ねた，それだけの行為の中に，喜びやさまざまなものをつかみとろうとしているこの子たち。

（高木昌子）

孤独のうちに生まれ，孤独のうちに死んでいく人間の宿命的な孤独性。たしかにそれは，一面人間の本質でもある。声も立てずに泣く子どもを，この高義くんの表情にダブらせて，小林は，進行性筋ジストロフィーのため，疑いもなくただ死に向って一日一日歩みつづけているほかしかない，高義くんの生の意味を思いやっては，深い感動にうちふるえる。

同じくまた，高木も状況はまったく違うけれど，おそらく普通なら見逃してしまうであろうような情景に出会って，はげしい衝撃を覚える。この子たちが，見えないながら，その眼をまさぐりあって，さしのばす手と手とのふれあいに，人間が人間として生きていく上での，今一面の本質でもある連帯を実感として体験したときの，この衝撃は，たしかに高木の一生におそらく忘れることのできない，ひとつの刻印づけを賦与することになるのであろう。人間が生きるってことほんとにすばらしいんだな── ごくありきたりの情景に出あって，驚きの目をみはり，躍動するかかわり手のこうした心の響きが，いかばかりこの子たちにとって，「人間としての生きざし」の支えになることであろうか。そしてまたそれに共ぶれする，新らしい成長脱皮が，小林の中に，また高木の中に芽生えてくる。生きるということの明証がここにある。

Ⅲ－2　生への讃歌

人間がその自分のすべてを出しきって，ひたすらにただ生きぬいていくことのすばらしさを，私たちは，こうして障害児者たちの「人間としての生きざし」の中から汲みとってきた。それは決して悲愴なものではない。たくましく自分自身の可能性への挑戦として，それとかかわる私どもの心を，根底からゆり動かす。私たちがいかに生きるということに誠実でなかったか，いや傲慢でさえありすぎたのではないか。これらのきびしい自戒の警鐘は，こうしてこの子たちと，とにかくなま身でぶっかっていったとき，烈しくうちならされて，身にゆさぶりをかける。

彼らのせい一ぱいに生きていくありかた，いうなればその「生きざし」の中に，本来的な生を讃いあげる，それこそ「生への讃歌」がある。

今年も5日間のうちに，さまざまな「出会い」を体験した。

弘ちゃんの隣りに位置している── できるだけ弘ちゃんの近くにいようというだけの理由で，実習期間中直接の担当ではなかったが，5日間ずっと食事介助をしたノブ。興味あることにしか反応しない，感情の昂揚した時にのみコトバを発することができるノブと，最初の3日間，私はただ無言で食事介助を続けてきた。他のスタッフの方の所作を眺めていてニヤニヤしたりするのに，私の問いかけには，ほとんど応じてくれないノブだった。

4日目，ひとりで絵を描いているノブの隣りにすわってみた。色は豊かだが不自由な手で描きつけているだけで，何の絵だかさっぱりわからない。あれこれきいてみる。まるで的はずれの質問に，やはり応じぬノブ。結局その時は分らずじまいだったのだが，私の前にあって，おかまいなしに絵を描きつづけるノブは強かった。ひとがなんと言おうと，そして何も言ってくれなくたって，絵を描きたいんだ。何かのために，誰かのために，生きてるんじゃない。今，自分がひとりの自分として生きてるんだ！

最後の日，同じコーナーで，ひとり遊んでいるノブと話しに行った。前日，指導員の方にノブのこともいろいろ教えてもらったし。ノブとはまず「車の」話をする。4日間サインによる応答さえしてくれなかったノブ。ニコニコ顔で〝ハイ〟だけでなく，〝シロ〟，〝クロ〟，〝キイロ〟……など，車の色さえコトバで表現してくる。「話す」というには，あまりにノブの単語数は少ないが，ふたりの間で淀みない会話がはずむ。

外野でああだこうだ騒ぐ私に目もくれず，一生懸命だったノブ。自分の「生」を力いっぱい生きているノブがいた。ゴロンと寝転んだノブの後姿が自己主張をしている。悲痛な叫びではない，強いていえば自己の生への讃歌である。私にはそう聞こえた。生きるって，たいへんなことなんだ，苦しいんだよ，誰だって。だけど，生きるってことそれだけじゃない。ノブの全身が「生」を謳歌していた。アイツに会えてよかった。心からそう思った。

彼らの生きる姿にふれることによって，彼らを知り，彼らを問う。そして，彼らを問うこと，ひとりひとりを理解しようとすることが，実際にかかわりをもち，たがいにぶつかりあうことが，私をゆさぶり，自分自身を考え，自分自身を問う方向へ向かわせる。弘ちゃんの障害の重みを考えることは，私自身生きることの苦しさを思わせ，ノブの生への讃歌が私に希望と勇気を与えてくれる。やはり私にとって，「なぜ，かれらだけが〝生きる意味〟を問われなければならないのか」という疑問は，私の内裡から起こる本音なのである。彼らの〝生きる意味〟を問うならば，私は私自身の〝生きる意味〟をまた問わざるを得ない。子どもたちの存在が，私にその問いをつきつける。

今年の実習は，自分がみえて仕方ない5日間だった。自分の弱さ，微力さ，未熟さ……　夜ごと弘ちゃんとのかかわりへの不安、弘ちゃんへの想いの尽きぬ〝離れてはつぶさにおもう〟私だったが，実際に子どもたちといるときに，自身への問いが除去できなかった。〝接しては忘れて行なう〟ことの挫折ばかりだった。子どもたちと「かかわり」がもてたのは，私が〝忘れて行なう〟ことができた時だともいえるような気がする。またまだだと思う。そして，またしても，我が身を問うてしまう私である。　　（都築伸子）

彼らの生きる意味を問うならば，都築は都築自身の生きる意味を問いかけねばならない。自らへの問いかけのきびしさに立ちすくみつつも，次第次第に自分が見えてくるのを実感する都築である。会えてよかった，ほんとうに。彼らが生を謳歌するならば，都築もまた自分の生を謳歌することができるだろう。ふたりで謳う，生への讃歌が，今すぐれたハーモニーをもって伝わってくる。

生きるということ，しかしそれをこのように一途に謳いあげることは，決してなまやさしいものではない。脳性マヒを生きるタカ行と所詮かかわりきることができなかったこの5日間を顧みて，野村はまた卒直に自分の思いを露呈する。たしかにそれは虚しいものである。それにもかかわらず，無心にこのタカ行とかかわって，やはり野村も，実感として生きることのすばらしさを謳いあげる。出口はまたかなりの距離をおいて，彼らの発達の可能性について考えてみる。そのとき，自分たちにとって何でもないようなことが　重い障害をになったこの子たちにとっては，まさしく死活の大問題であることに気付く。彼らの，人間存在としての意味をがっちりと受けとめて，改めて彼らの中にこそ，もっとも人間らしい生き方があることに，ある種の感動をよびさまさせられる。形こそ違うが，都築と共に，彼らの生への讃歌が，ここでも高らかに奏でられるのである。

何故，彼タカ行に深いかかわりを持つことができなかったのか。いちばん大きな原因として，私が思いつくのは，彼を，初めてみた時の印象が，そのまま，続くかの様に，私の中に，彼自身の安らかさ，平穏な毎日を，ずっと感じ続けていたことにあるように思うのである。私は，彼から，実習前に予想していた，生きる為の叫び，苦悩を感じとることができなかった。できなかったというよりも，今も，むしろ，現在の彼には，苦痛が，障害を背負った故の苦痛が，あるのだろうかと思ってしまうのである。彼は，あんなに，静かな顔をしているのではないか。今の状態で，彼なりに十分満足しているのではないか。もちろん，愛情に飢えているということはあろうが。こんな気持ちが，実習中，私の心を占めていたのである。私が，彼を表面的にしか理解できず，さらに，深いところの彼をみる

ことを怖れ，安らかなものだけに，目を向けようと，無意識のうちに，自分をそうさせてしまっていったのかもしれない。

彼には，言葉がない，手足が，自由に動かない。もしかしたら，彼の苦悩は，測り知れないものなのかもしれない。ただ，それを出すすべを持たないというだけで。もし，そうならば，私は，5日間，何をしてきたのだろうか。そんな彼を理解しようともせず，ただ，べったりとくっついてきただけで。彼は，一体，どう思っていたのだろうか。考え出すと，何が，何だかわからなくなってしまう。何を，どう考えても，結局，私ひとりの，勝手な解釈。まさに今，生きつづけている〃彼と私〃の5日間がそこにあった。そして，また彼は，脳性マヒという宿命を背負って，これからもずっと生き続けていく。それだけが，いつわりのない〃事実〃。その事実の前で，私の考えは，虚しく空回りするだけ。そして彼にとって，意味があったにしろ，なかったにしろ，私は5日間、自分なりにせいいっぱい自分を出しきったということで，自分自身を慰めている現在である。

考えはじめると虚しくなるだけの5日間であった。しかし，何も考えず，ただひたすら，彼とかかわっている時，〃ああ　この子も私もふたりとも，生きているんだ〃という言いようのない感概に胸打たれるのであった。5日間，深いかかわりこそ持ち得なかったが，とかくぜいたくに生きたがる私が，忘れていた，〃生きている〃ただその事実のみで，何ものにもまさるかけがえのないものが，もうそこにはあるのだということを，私は彼から教えられたのである。私にとってのはじめてのコロニー体験は，〃生きる〃ことのすばらしさを，まさにはじめて教えてくれた体験であった。〃生きる〃ことはすばらしい。私は，コロニーに来てよかったとつくづく思うのである。

（野村真理子）

私にとってコロニー体験とは，現実の世界に自己を位置づけることであった。観念的にはどのようにも評することが出来る障害児のことを，現実世界の中で，どこまで彼らと一体化出来るのか，自分では知り得たつもりでいる。コロニーという現実世界がどのように存在しているのか，実世界の中では，この機会をのがせば永久に踏み込めなかったかもしれないコロニー。コロニーの中で待ちうけているものが何であるにせよ，私はその世界に足を踏み込んだ。そして彼らの介助をし，介助を通して彼らと交流したのである。内部において私の持ちつづけてきた障害児観はどのように変化を遂げているのか。彼らが我々健常者と同じ人間として生まれてきたのだということは，実体験を通して確信となり得たかどうか。彼らは一生懸命生きているのだということはどうなのか。さらにまた彼らの中にある発達の可能性についてはどうなのか。自らの胸に問うてみる。彼らはまさしく生きていた。生きることへの必死の努力を続けていた。自分にとって何でもない歩行・咀しゃく等の日常行為が，彼らにとっては生命を維持するための重大な取り組みであることを知らされた時の驚きは消しがたい。まさに，彼らは生きることへの必死な努力を続けていることで，人間として尊いし，もっとも人間らしいのではないか。また彼らの無表情にも見える顔の中にふともらす微笑，怒りの声，泣き声。彼らのか細くではあるが，変化に富んだ表情は，彼らの人間性を証明しているようだ。彼らは障害というハンディキャップを背負いながらも，人間として生きているように思う。実際に彼らと交流し，彼らと笑いを分かちあった時，はじめて彼らの人間存在を重く受けとめることが出来たのである。

（出口嘉代子）

Ⅲ－3　自分ひとりのいのちを生きる

コロニー実習が終わって，はや2ケ月が過ぎようとしている。そして今私はもう一度みずからに問いかけなければならない，僕自身の唯一の尺度であるみずからの誠実さにかけて……「生まれてきてすみません」では何も解決しない，何の出発にもならないと信じた。自分が，何よりも現実に重度心身障害児に出会った中で，みずからに問うた言葉が数々ある。〃おまえは何のために生きるのか，おまえにとっての生の意味とはいったい何なのか〃〃おまえの見出し得る喜びは期待したよりはるかに小さく，苦痛の方が予想よりはるかに大きくても，その喜びのみに新たな期待を見出し，そこにかけてゆくことができるように……〃〃生きているということは今，ほほえみ，笑うことなんだ〃　それらの問いかけにいったいどんな解答を出すことができるのか。

ただ，今の私にできることは，なんとかかかわっていこうとする努力をつづければ，かならず理解しあえる（通じあえる）と確信することである。そして，看護婦さんの〃これ以上悪くならないように，心しているのですよ〃という言葉に背を向けて、明日からまたケンケンの笑顔だけで一日が終わらないように，音ででも彼とコミュニケイトできればと思い，そして1歩づつ，自分の心の壁をとりはずして，あせらず少しづつ少しづつ，すすむことができればと思う。彼の笑顔

はまさに生きているそのあかし…… 彼の笑顔の中にこそ彼の生存はあるんじゃないのか。このおチビさんはいったい何を考えているんだろう。どうして彼は笑うのだろう。何も見えない目を細めて。

「生まれてきてすみません」では何の解決にもならないこと，はじめに書いた。私にとって大きな支えであったのは，ケンケンの笑顔だけなのかもしれないし，客観的に見たらそれこそもの言わぬ子とひとりの青年がただいっしょにいた5日間であったにすぎないかもしれないが，私にとって重要なことは，私の投げかける言葉，私の肌の感触に対する彼の反応，それ自体であって，さらにつけ加えるなら，それによって私が感じとった，彼そのものなのである。ひとりの人間が楽しい時，もうひとりがつまらなさそうであれば，その人だって楽しみを持ちつづけることはできない。私と，ケンケンが，ふたり声をあげて笑いあうことの出来たその瞬時，瞬時が重要なのであり，逆にそうしたことを認める勇気が必要なのだと思う。さらにまた、客観的に見て，たとえささいなことでも，それをつまらないことで終わらせない勇気が必要なのだと思う。そこにおいてでしか，私とケンケンの間でのかかわりを，今位置づけることはできない。それは私の能力の範囲を越えているからである。

はじめてのコロニーで，不安と緊張で，満足に看護婦さんや保母さんと話をすることにとまどいのあった私を，終始支えてくれたのは，ほかならぬケンケンの笑顔そのものであって，それだけでも私は彼にこたえていかなければならないと考える。（小室久）

笑顔はたしかにケンケンの生きていることの明証（あかし）だと，小室は考える。ケンケン自身その自分ひとりのいのちを生きぬいていくための，その笑顔がいかばかり小室にとって大切なものだったことであろうか。見えない目をじっと見すえて，小室の顔をまさぐるケンケンに，小室はまた「ケンケン，私のすがたが見えますか」と問いかける。そこには事実，ふたりのつながりが躍動する。自分ひとりのいのちを生きることは相手のいのちを生きることにも連なるものといってよい。人間が人間同志，ほんとうの意味でのつながりの中で，生きぬいていくことのすばらしさが，ここにもまた讃えられる。

もはや「生まれてきてすみません」「生まれてきてごめんなさい」の次元ではない。「人間としての生きざし」は，こうして他の何人からの手によって，支えられたり，恩恵を蒙ることによって，そのすがたを顕示するものではないようである。まさしく，共に世界を分かちあい，貧しかろうと，力弱かろうと，障害いかに重かろうと，世界内存在として共通の地平に立って，共にふたりで歩を強くふみ出す生きかたこそがここに期待される。それは，もうおどろおどろの苦悩の中で，ただもがきにもがき，うめきにうめき，形相悪化したままで，手負いの猪といった形で生きぬくような「生きざま」としてあざけられたり，あわれまれたりするものであってはならない。より積極的に，主体的に，明日に向って堂々と自己を開示していこうとする自己実現の過程を支える意味をもこめて，この小論では，あえて「人間としての生きざし」を浮かびあがらせていくべく意図したのである。「がんばります。生まれてきたからには」 彼らをして力強くそのように宣言せしめる，そのための援助の手をささやかながらさしのべたいと考える。

付記：この年また，愛知県心身障害者コロニー，こばと学園において，村上氏広総長，岡田喜篤園長をはじめとする関係各位の，心あたたまる配慮を得た。年重ねるごとに，私たちの実習の意図にかなり理解を深めていただくことが期待できたのを喜ぶとともに、私たち自身，日頃のきびしい療育実践に心からなる敬意を払いつつも，そうした日ごとの実践が，寛容にも許された私たちの療育実習によって，かなりの御迷惑をかけてきたのではないかと深く自省し，またきびしく自戒するものである。ここに厚く感謝の微意を表したい。

前年にひきつづき，本実習には，大学院博士課程（後期、前期）の後藤秀爾，譲西賢，江口昇勇の三君が加わり，自由な眼で，コロニー内での療育のありかた，子どもとのかかわりを，それぞれ自己課題として問いかけると共に，若いフレッシュな実習生諸君に対してスーパーヴァイザーとしての役割をとっていただいた。彼らの熱意あふれるこれへの協力と，新らしい仲間の真摯な実習への参加と夜ごとの討議の中から，本稿また成ったものといってよい。

レポートの一部を本稿に引用させていただいたと否とにかかわらず，以下，若い参加者の氏名を列挙して，その労をねぎらうものである。

学部3年生：鵜野裕美子，大野正喜，木村有希，小林京子，小室久，高木昌子，高橋昇，出口嘉代子，野村真理子，吉川由香里

学部4年生：梅田和子，都築伸子，溝口明子

学部研究生：日比野敬子，松尾真由美

（1978年7月31日受稿）

重度心身障害児への人間学的接近（第10報）

A HUMANISTIC APPROACH TO THE SEVERELY PHYSICALLY AND MENTALLY HANDICAPPED (the 10th report)

— Way of life as a self-actualyzing person for the severely physically and mentally handicapped —

Eiji MURAKAMI

We experienced the practice to give assistance for the treatment of the severely physically and mentally handicapped who lived in the Kobato-Gakuen, for the eighth in this year.

The purpose of this report is to clarify and to admire over again the significance of ways of life as a self-actualyzing person for the handicapped by using the students' final reports which aim to let reason rule their feelings under those experiences. We attempted again to declare the importance of the inrecoverable life as human being for the handicapped in this report too.

I dare say the fresh impressions of new members through their experiences to have deeply contact with the severely handicapped at the first time is very valuable. All the new members feel, at first, it's too difficult to communicate with them, but they are also astonished that the handicapped show their zest of living imdependently without help from the others. It seems this is nothing but their self-assertion.

On the otherhand, it is undoubtedly for the handicapped to eager to contact with their family, especially their parents with whom they feel to have not so much chance to live usually. They cannot help anyhow to feel that they are isolated and lonely.

At any rate we seemed it had much trouble to live their vivid life as a self-actualizing person for the handicapped, but we must not hesitate to encourage them to live for their best way. It's no doubt they should do best to live their true life, as long as they live and breath in their world with us.